

*「管内の教育」は島根県教育庁 出雲教育事務所ウェブサイトにてカラーで掲載されています。

所報

第51号

管内の教育



主な内容

- 1 調整監 学校訪問を終えて
- 2 第1群の学校訪問指導より
- 3 アンケートQUの効果的な活用に向けて
- 4 私（わたし）たちの道徳」にこめられた思い

出雲教育事務所
平成26年 9月

アンケートQUの効果的な活用に向けて

指導主事 児玉 浩二

アンケートQU(以下QUと標記)はH22年度より「不登校に対する未然防止実践モデル地域指定事業」としてスタートし、H23・24年度に小学校5年生、中学校2年生を対象とした「学習意欲を育む学級集団づくり事業」、平成25年度からは「いじめ対応支援事業」と名称を変えて行われてきました。現在、「すべての小中学校の教職員が、児童生徒に対する理解をより深め、子どもたちが安心して学校生活を送れる学級づくりの支援」を目的の1つとし、市町の理解と協力を得ながら継続しています。

管内の多くの学校では、年々QUの活用が充実し、効果的な取組が実施されてきています。昨年度「児童生徒理解や学級理解が深まり、個々の児童生徒への支援や学級経営、授業に生かされた」等の意見が学校訪問時に多く聞かれました。一方、実践報告書等からデータの分析や取組において依然として学校間、学級間で意識の差がある等の課題も見えてきました。

QUで大切にしていきたいことの1つが、その開発者である河村重雄氏の言葉にもあるように「結果に一喜一憂するばかりでなく、示された事実(結果)から学校や学年という『組織』として改善に取り組むこと」つまり、児童生徒や学級・学年の状況に合った取組を様々な視点から「組織」で考え実践することを通して、個々の教職員の「教師力」を上げ、「学校力」アップにつなげていくことだと考えています。

「学力」の課題と「生徒指導」の課題に一体的に取り組め、また教職員の連帯感も高めることのできるQUを2学期以降も効果的に活用し、子どもたちの「人間力」の育成につなげていきたいと思ひます。

表紙にこめられた思い ～「私たちの道徳」～

指導主事 北川 宏己

今年度、従来配布されていた「心のノート」が全面改訂され、「私たちの道徳」として作成され、全国の小・中学校で活用されています。

作成された4冊の表紙には、一本の木の成長が描かれています。小学校低学年版の「小さな芽」が中学校版の「立派な若木」へと成長していきます。その姿は、まさに一人一人の子どもたちが、発達段階に応じた道徳性や道徳的実践力を身につけ、自立した大人へと成長していく様子を表しています。

子どもたちのより良い道徳性や道徳的実践力を育成するためには、実態や発達段階に応じた道徳教育を全教職員の共通理解のもとで進めていく必要があります。その際、是非この「私たちの道徳」を有効に活用していただきたいと思ひます。学校全体でこの冊子の活用法について共通理解を図り、年間指導計画の中に効果的に位置付けるなど、各学校で特色ある道徳教育の推進をお願いします。

「私たちの道徳」の活用例としては、

- ① 道徳の時間で活用する
- ② 各教科の学習内容に関連させて活用する
- ③ 外国語活動の内容と関連させて活用する
- ④ 総合的な学習の時間の動機付けや自らの生き方を考える際に活用する
- ⑤ 特別活動の各内容と関連させて活用する
- ⑥ 学校・家庭・地域の連携を図るために活用する などがあげられます。

なお、今年度中に文部科学省より指導用の参考資料が配布される予定です。



島根県教育委員会で作成した「しまねの道徳」(小学校高学年用)の活用もよろしくお願ひします。

学校訪問を終えて

調整監 糸賀 和雄

5月中旬から約1ヶ月をかけ、所長とともに、管内98校すべての小中学校と4つの市町の教育委員会を訪問させていただきました。各校とも年度初めの慌ただしい時期に、資料の準備、訪問当日も運動会や総体等それぞれの学校行事やその準備・練習等でお忙しい中でしたが、大変丁寧に対応していただきました。改めてお礼申し上げます。

この訪問では、今年度の校内体制や人事異動計画等の様子をお聞きする中、それぞれの市町、学校が置かれた環境、自然・文化に直に触れることができ、各校ともその学校の伝統・文化を基盤とし、ふるさとのよさを生かした特色ある教育が展開されていることを実感しました。また、多くの校長先生方が“チーム〇〇学校”を合言葉とされ、教職員・子ども・保護者・地域が一体となる学校経営への熱い思いをお聞きすることもできました。改めて出雲管内の教育の充実とその伝統の重みを感じた次第です。

共通の話題としては、学力、発達障がい等の特別支援教育、不登校やいじめ、ネットトラブル等がある一方、各校とも経営方針等に「地域との連携・協働」「地域あつての学校」等、地域との関わりの大切さが謳われその充実が図られていました。始まって10年目を迎えた「ふるさと教育」も着実に各校教育の柱の一つになっていることが窺われました。

一方、地域に目を向けると、近年の県の人

口減少とともに各地域において少子高齢化・過疎化が進み、地域の担い手・文化の継承者不足などの課題が深刻化し、市町村合併や学校の統廃合が進むにつれ地域によってはそのidentityが失われることも危惧されています。「地域で大切にされた子どもは、地域を大切にする。」(「地域」が「家庭」「学校」となっても同じ)と言われます。こうした現状の中、今後も地域の中での学校教育の役割はますます重要視され、より双方向性のある連携・協働が求められるとも思っています。

この度、島根県教育委員会では、今後5年間を見通した島根の教育について「第2期しまね教育ビジョン21」を策定しました。二つのテーマ「これからの社会を生き抜くため、子どもたちに必要な力とは何か」「教育の成果が地域社会の活力とつながるためにはどうすればよいか」の下、「島根を愛し 世界を志す 心豊かな人づくり」を基本理念として、「向かっていく学力」「広がっていく社会力」「高まっていく人間力」を3つの力(島根の教育目標)で表現整理され、様々な施策が展開されていくこととなります。

各学校におかれましても、こうした県のビジョンをご理解いただき、各校教育の推進に生かしていただきたいと思ひます。そして、今一度それぞれの地域・学校で「学力」や上記テーマについて「何のための?」「どんな?」等、地域・保護者と話し合い、思いやベクトルを共有し協働するなど、それぞれの地域に即した特色ある教育がより相乗的・効果的に実現できるよう、基盤となる保護者・地域への働きかけもよろしくお願ひします。

市町派遣の指導主事からの報告

～第1群の学校訪問指導より～

市町派遣の指導主事の専門性（生徒指導、特別支援教育、学力向上）等を生かした学校訪問指導を実施しました。

出雲市 松井 誠

「学力向上」～各校の「確かな学力向上策」への取組から～

1学期には、小学校31校と中学校9校に訪問しました。各学校では、児童や生徒の実態や課題をもとに作成した「確かな学力向上策」に取り組んでおり、今回の訪問では実践の様子や特色ある取組について、授業や協議から窺うことができました。今回は3つの視点から、各校の特色ある取組をご紹介します。

課題に向かう集団づくり

多くの学校で「学習のルール」が設定（目標化やイラスト化）されており、より充実した学びとなるように共通理解が図られていた。

- ☆ A小学校では、傾聴する場面で思考や集中が途切れないように、指示があるまで教材や教具を机に出さない、広げないといったルールづくりを徹底している。
- ☆ B小学校は、「学習スタイル(学習展開や共通した指導内容)のルーティン化」によって、習熟の時間をより確保できるよう共通した指導を行っている。
- ☆ C中学校では、授業や学習のまとめ(テスト)に向かう心構えや準備などを「学習の手引き」という冊子にして生徒に配布している。

学びを深める授業づくり

小・中学校に関係なく、授業導入時の「めあて」の提示と授業終末時の「振り返り」を意識した授業展開を試みる学習が多く見られた。

- ☆ D小学校での家庭科の学習では、調理実習のめあてだけでなく、調理の手順や注意点などが板書でよく整理されており、児童が本時の学習内容をしっかりと把握できる「板書の構造化」がなされていた。
- ☆ E中学校では、「めあて」や「振り返り」をカードにして各教室の黒板に貼り、どの教科担任も、この2つを意識して活用できるようにしていた。
- ☆ 多くの学校で、書画カメラやプロジェクターや大型ディスプレイを使用した授業が見られ、児童生徒が記述したものや操作的な説明を全体に伝える場面で、効果的に活用されていた。

家庭学習の改善に向けて

“家庭学習の手引き”を配布するだけでなく、学級懇談会や学級通信での話題にしたり、学期ごとに数回のアンケートを実施して取り組み状況を把握したりするなど、定着に生かす学校があった。

- ☆ 家庭学習の重点週間を設定して、家庭と連携して取り組んでいる学校がある。
- ☆ F中学校では作成した家庭学習の手引きに、「何のために学ぶのか」「各テストにどんな意味づけをしているのか」を明記している。

雲南市 本間 博

「学校全体での取組・ICT機器の活用」

小学校16校、中学校7校、約3ヶ月かけて雲南市内全ての学校訪問を終えました。雲南市は支援員・介助員配置事業を行っているため、その訪問も併せて行いました。その中からの実践を紹介させていただきます。

A小学校では、どの教室も整理整頓され、落ち着いた雰囲気の中で学習が進められていた。生活目標の掲示等も学校全体で統一されており、生徒指導、特別支援教育ともに全教員による共通理解が図られていると感じた。授業では、子どもたちの素直な反応がたくさんあり、温かな雰囲気を感じた。先生の声の大きさ、指示の出し方も大変うまく、ICT機器の活用、視覚情報の提示など授業に対する工夫が随所に見られた。また、どの学年も黒板に学習課題（赤いチョークで囲み）がきちんと明示されていて、こうした課題の提示や振り返りについては学力向上策でもあり、この点も学校全体で徹底して取り組まれていると感じた。



「授業づくり研修会にて携帯タブレットを使った実践紹介」

学校訪問では、校長先生、教頭先生をはじめたくさんの先生方が温かく迎えてくださり本当にうれしく思いました。ありがとうございました。

奥出雲町 川角 朋之

「学力向上及び生徒指導・特別支援教育の推進」 ～学校・家庭・地域・専門諸機関等との連携～

5月～7月にかけ、町内13小中学校を教育委員会事務局はもとより、教育委員、町議会議員、公民館長、幼児教育（保育所・幼児園・幼稚園）関係者に加え社会教育関係者も一緒に訪問しました。本年度は教育事務所の指導主事から、喫緊の課題である学力向上に向けた具体的・実践的な指導のあり方についての指導も受けました。

学校間の連携の充実をめざして

これまで実践を重ねてきた保幼小中連携ステップアップ事業、道徳教育総合支援事業や環境教育総合支援事業等を活用しての取組において、各中学校区を基盤に連携が図られている。また本年度から運動好きな奥出雲町の子どもを育てるプロジェクトが始まり、運動や遊びを通じての連携（学校間の接続）を見直すきっかけにもなっている。学力向上や生徒指導上の課題の共有はもちろんのこと、特別支援教育を基盤にした個に対する細やかな支援を生かすためにも連携のあり方の探求は欠かせない。

- ★ 一昨年度から始まった中学校区ごとの合同宿泊訓練（5年生：吾妻山キャンプ）、合同修学旅行（6年生：広島方面）に加え、町内の全6年生（複式学校は5年生も参加）が一堂に会してのたたら体験学習も予定されており、他校児童との交流や意見交換が活発になっている。
- ★ 「メモの取り方」（小学生）、「ノートの作り方」（中学生）、「板書の仕方」（教師）等、町内の児童生徒に身につけさせたい力を培うため、各学校において実践的研究が進められている。各校の実態を捉えた創造的・計画的な実践の集積が楽しみである。

見通し・振り返りの充実

各教科等の指導の重点（個人用）の一つ（県教委が提示）に「見通し・振り返り学習」が示されている。本町では、まず教師が「めあて」と「振り返り」を意識し、子どもの学びを充実させる実践が定着しつつある。



板書から読み取れる「教師のよさみつけ」

授業の最終場面の板書は、学習指導における教師と子どもの足跡そのものである。本町ではこの板書を研修（研究）の一つの視点と位置づけている。特に次に示す3つの視点から板書を大切にしたいと考えている。

- ①ストーリーが見える。
- ②子ども一人一人の顔が見える。
- ③ゴールが見える。



飯南町 森山 雪美

「学力向上」～全校体制で取り組む学力向上～

各学校では、学力向上に向けて授業改善や家庭学習の充実などに全校体制で取り組んでいます。その中のいくつかを紹介します。

家庭学習の充実

各教科の学習方法や調べ学習の仕方など、学び方について丁寧に記述している。加えて、日々の家庭学習の記録や定期テスト用の学習チェック欄も設けて常に活用させるなど、「学習の手引き」がそのまま「学習のあゆみ」となるように工夫している。

学習方法について個別面談を行うとともに「自学ノート」と「校内独自テスト」とを関連づけることで学習意欲の向上や学習の充実を図っている。

「要約学習」の取組 ～全小中学校～

文章から必要な情報を取り出し関連付けて内容を図式化し、それを基にプレゼンテーションする「要約学習」を取り入れ、学力・授業力の向上に生かしている。

- ①情報活用能力の育成として総合的な学習の時間に年間数時間の「要約学習」を設定する。
- ②「要約学習」の校内研修、「要約学習」の考え方を取り入れた公開授業研究会を行う。
- ③学習の手引きで紹介するなど、町内全校で取組が始まっている。

言語活動とICTを組合わせた授業改善

ある中学校では、学力向上に向けて一人一台のタブレット型端末も活用しながら授業改善に取り組んでいる。学習支援ソフトの計算・英単語のドリル機能を使った知識・技能の習得型学習、一人一人の考えや作品を全体で共有し、意見を練り合う協働学習などに活用されている。



瞬時に分かる各生徒の学習状況や履歴データは、学習のつまづきの把握、個別の支援、適切な評価などにも役立てられている。生徒からは、「学習への興味が湧く」「みんなの考えがよく分かり、話し合うのが楽しい」という声が聞かれた。生徒が自らの興味・関心に応じて主体的な学びを実現する環境づくりとしても効果が期待される場所である。

この学校では、課題に応じて話し合ったり書いたりするなどの学習の基盤となる言語活動の充実がしっかりと意識されたうえで、ICTの効果的な活用が検討され、授業改善が進められている。



